

〔記事〕

看護学科における国家試験対策指導の実績と課題

村上 大介¹⁾ 新井 志穂¹⁾ 木村 涼子¹⁾ 渡辺 隆夫¹⁾ 宇月 美和¹⁾

板垣 恵子¹⁾ 庄子 幸恵¹⁾ 伊藤 てる子¹⁾ 鈴木 秀樹¹⁾ 作山 美智子¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

要旨

看護師国家試験の合格率を上げるために、これまで行ってきた看護師国家試験対策を振り返り、さらに充実したものとする。近年の学生の特徴として、実践力、日本語力、思考力の不足が指摘されるところであるが、看護師国家試験にはこれらの能力が求められる。A 大学看護学科では、4 年次後期から本格的な国家試験対策を開始している。学内では、主に教員による対策講義と学内模試、その他、業者による業者対策講義・学外模試を実施し、Student Adviser (SA) 教員、卒業研究指導教員、国家試験対策委員の教員が連携し、学生指導を実施してきた。個別指導を要する学生もいたが、それによって他の学生と同様の成績の伸びを実現できており、個別指導の効果はあったと言える。学生の学習状況をいかに早く適切に捉え、個々の学生にあった指導を行うかが今後の課題である。

【キーワード】 看護師国家試験、個別指導

I. はじめに

近年、我が国では看護系大学の新規設置が進んでおり、平成 27 年 10 月現在、全国で 250 の大学が設置されている¹⁾。そのため、複数の看護系大学が設置されている地域もあり、大学間では様々な競争が存在する。このような環境下で各大学が独自の特徴を活かそうとする様々なアプローチを試みている現状がある。その中の一つに国家試験の合格率がある。

他大学との競合、差別化を図るため、合格率 100% を達成することは重要な課題である。これを実現するため、これまで行ってきた国家試験対策を振り返り、さらに充実したものにしていく必要がある。

これまで大学における看護師養成課程においては、学科を挙げて看護師国家試験対策の取り組みをすることはどちらかといえば少数派であったと思われる。しかし、複数の大学が設置される中で、

多様なカリキュラムによる教育、学習内容や経験を持つ学生の入学により、日常的な学習習慣を身につける指導も必要とされている²⁾。

看護師国家試験における合格者数はこれまで一定数を確保している。平成 23 年から平成 27 年までの 5 年間の「第七次看護職員需給見通し」で、平成 27 年には充足率は 99% までになるとしており、合格者数は今後難易度が下がることは考えにくい現状にある³⁾。

一方、近年の看護学生は様々な特徴が指摘されている。安ヶ平らの報告のなかで、特に看護師国家試験に影響が強い特徴としては、「自分で目標を立てられず主体的な学習態度に欠ける」、「考えるプロセスより正解を求める」、「知識を関連づけたり、活かすことができない」、「読み書きや理解力の低下」が挙げられる⁴⁾。

外部模試業者の分析としても、看護師国家試験受験者の特徴として、実践力不足、日本語力不足、計算力不足、「できて当たり前」の問題を解くこと

ができない学生が多くいることが指摘されており、「知識を関連づけたり、活かすことができない」、「読み書きや理解力の低下」などの特徴が表れていると言える³⁾。

看護師国家試験の問題の特徴として、想起型、解釈型、問題解釈型という3つに分類できるとされている。①記憶したことを想起する想起型の問題、②与えられた課題を解釈して答える解釈型の問題、③問題解決の方向性を考える問題解釈型の3つである⁵⁾。

想起型の問題に対しては繰り返し模擬試験を受けることで、記憶学習をする必要がある一方で、解釈型、問題解釈型では、知識を活用し、状況判断力が求められる。特に状況設定問題では、患者の置かれた状況を理解し、判断することが求められる問題が増えている。

A大学では、状況設定問題が苦手という学生の声が聞かれ、実際の得点の推移としても後期開始後すぐは得点が伸び悩む学生も多く見られたことから、「知識を関連づけたり、活かすことができない」学生が少なからず存在していると考えられる。そのため、解釈型、問題解釈型の問題の得点に結びつけるための対策が必要であると考えた。

そのような中で、今回はA大学における過去の看護師国家試験対策の実際を振り返り、実施した対策の実績と分析を行った結果を報告する。

II. 看護師国家試験に対する他大学の取り組み

まず他大学での取り組みについて述べる。文献からは次に挙げる3つの傾向が見られた。

1) 大学の教育方針による学習意欲の強化

国家試験対策として何かをするのではなく、大学教育の中で学習行動を身につけ学習意欲を引き出し、自己学習能力を伸ばすことで結果的に看護師国家試験に取り組む姿勢や取り組み方を獲得することを目指す⁶⁾。

2) 看護師国家試験対策の実施

非常勤講師による補講・学習相談、専門予備校の出張講義および模擬試験受験、講義経験豊富な

専任教員らによる看護師国家試験対策講義のほか、模擬試験で成績が伸び悩む学生を対象として、非常勤講師による強化学習会、個別面談を実施する²⁾。

3) e-learning を用いた学習支援

看護師国家試験対策として、e-learning の活用をより効果的に活用するため、データベースの構築、オンラインコンピュータプログラムを開発した⁷⁾。

III. A大学の看護師国家試験対策プログラム

現在、A大学看護学科における看護師国家試験合格率は平成25年度93.8%、平成26年度93.4%と、9割以上の合格率を実現できている。全国の看護師国家試験の合格率は、平成25年度89.6%、平成26年度は90.0%であり、全国平均は上回ることができている⁸⁾。

A大学の取り組みは、IIの他大学の取り組みと比較すると、2) 看護師国家試験対策の実施の内容と似通っている。国家試験対策委員会を組織し、臨地実習が終わる4年次の後期（特に10月以降）から本格的に看護師国家試験対策を実施している。実施している内容は、学内では主に教員による対策講義と学内の模擬試験（以下模試とする）、その他、業者による対策講義・学外模試である（図1）。

なお、学外模試は全国の模試受験者の中でも順位や偏差値が算出されるため、それらを活用し効率的な学習を行うために実施している。

国家試験対策委員会は、これらの模試や講義の企画運営を行い、出席状況・模試成績を把握し、教員全体に共有を図っている。

1) Student Adviser 制度（SA制度）の活用

Student Adviser 制度（以下SA制度）とは学生が入学後、教員一人が十名前後の学生を担当し、学習や大学生活などの問題に悩む学生に対し相談に応じ、指導を行う制度である。これによって個々の学生の性格特性を把握し、大学生活をスムーズに送ることができるよう配慮されている。国家試験対策における指導の際は、学生から信頼を得た

			月											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
4 年 生	看護師 ^{1, 2)}	講座						3	14	7	8	1		
		模擬試験					1		3	3	4	1		
		保護者への成績発送							1		1		1	
	保健師 ^{1, 2)}	講座							5	2		1	1	
		模擬試験					1		1		1			
	教員指導 ¹⁾	面談							1		1			
個別指導(必要時)														
3 年 生	看護師 ^{1, 2)}	講座											1	1
		模擬試験									1		1	
2 年 生	看護師 ^{1, 2)}	講座												
		模擬試験											1	

1) セル内の数字は、実施回数を表す

2) 業者委託を含む

図 1. 看護学科国家試験対策講座・模擬試験・指導関係年間スケジュール

SA 教員が面談、指導を行うことで学習意欲を引き出し、より効果的に学習を進めている。

2) 卒業研究指導教員の関わり

卒業研究の指導教員は、この時期学生と非常に密な関わりを持つため、卒業研究の指導と併せて、国家試験の学習状況をフォローアップしている。

3) 国家試験対策委員の関わり

国家試験対策委員は模試成績の分析を行い、個別指導を行う上での情報提供をするとともに、国家試験に特化した指導を行っている。それにより、個々の学生それぞれの試験に対する学習準備状態に応じた国家試験の学習を進められるよう配慮している⁹⁾。

以上のように一人の学生に対して、SA 教員、卒業研究指導教員、国家試験対策委員がそれぞれの視点から関わる体制をとることで、学生の学習状況にあわせた国家試験対策をとれるよう工夫がなされている。

これらのプログラムを実施した結果、10月から1月にかけて平均点が上昇し、合格圏に入っており、本格的なプログラムが開始してから数ヶ月で変化が見られたことが分かる(図2)。

IV. 学生の学習準備状態に応じた個別指導

プログラムを進めていく中で、学内講義や学内模試の欠席が目立つ学生が出てきた。そのような

学生の中には、学習の進まない学生や結果が伸び悩む学生が多く、教員が個々の学生の状況に合わせて、個別に対応、指導を実施した。

その中でも個別指導により合格まで導くことのできた7例を紹介する。(表1)

1) 個別指導学生の学習状況と成績推移

(1) 学生 A

持病のため病院に通院しながら受験した学生。

体調不良のため、学習に集中できる時間・期間は非常に短く、本格的に学習に集中できたのは国家試験の実施される月に入ってからだった。

(2) 学生 B

遠方から通学していた上に、体調不良が重なり、教員による学内模試を受けていなかった学生。学外模試は受験していた。

(3) 学生 C

教員による学内模試中に電子書籍を読む、秋に旅行へ行くなど、学習に集中して取り組む姿勢が見られなかった学生。

(4) 学生 D

教員による学内模試を4回欠席した学生。必修問題に集中して取り組んでいたため、実力が伸び悩んだ。

(5) 学生 E

公務員試験、保健師模試を優先的に取り組んでいたため、看護師模試の成績が伸びなかった学生。

就職が決定した後、看護師国家試験の勉強を開始した。

(6) 学生 F

学習に取り掛かるのが遅かった学生。

(7) 学生 G

定期試験の成績は良いが、模試の成績は伸び悩み、周囲の評価に不安があった学生。11月から学内模試を欠席するようになった。

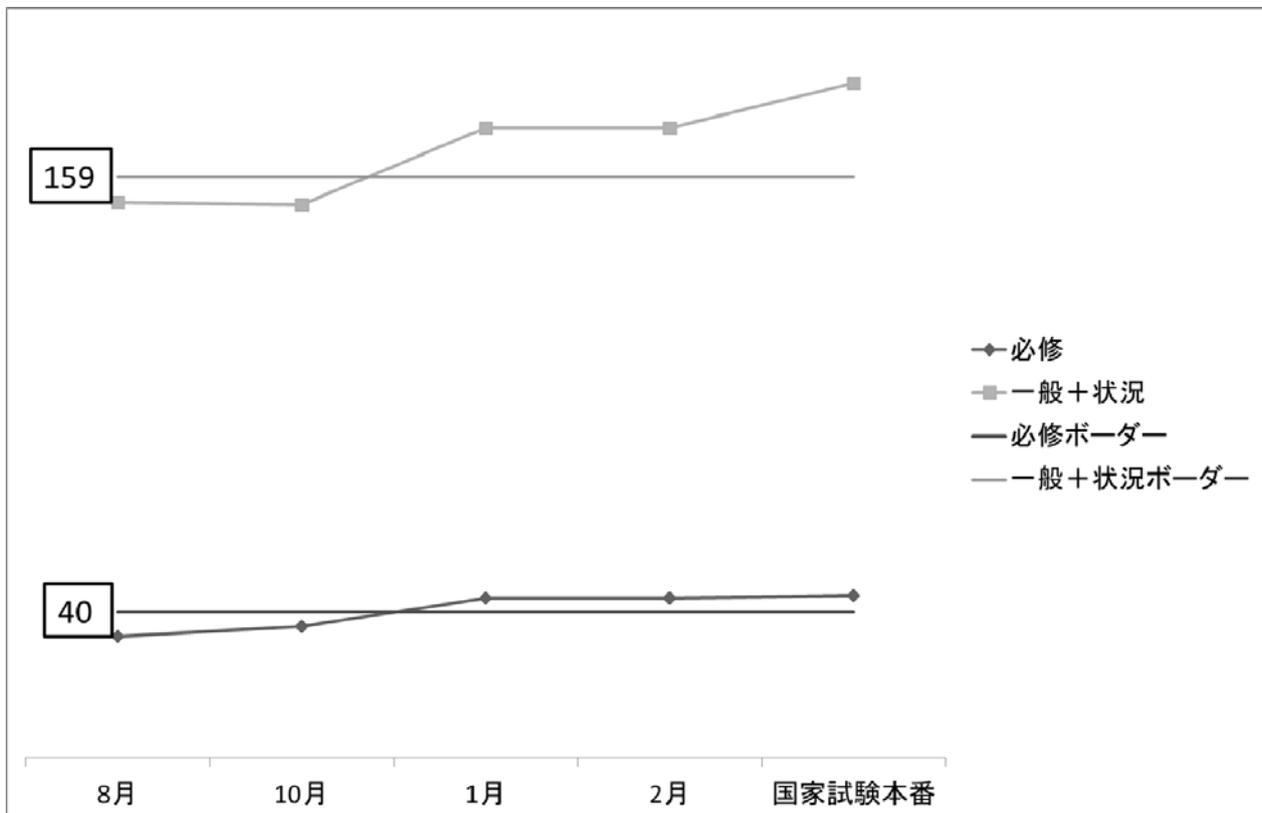


図 2. 看護師模擬試験および看護師国家試験成績の推移 (平均点)

表 1. 個別指導学生介入一覧

学生	状況	指導内容
学生A	持病のため病院に通院しながら受験(1年留年)。体調不良のため、学習に集中できる時間・期間が非常に短かった。	教員の励ましにより、体調不良下での学習を地道に続けた。国家試験近くに体調が回復し集中して学習した。
学生B	遠方から通学。学内模試は体調が悪く受けていないが、学外模試は受験。	体調不良ながら、学外模試は受験しており、学習への意欲は見られ、体調に配慮しながら学習を支援した。
学生C	模試中にほかのことをする、旅行に行くなど、学習に集中していない様子が見られた。本格的な勉強に取り掛かるのは遅かった	空き研究室で勉強した。
学生D	学内模試を4回欠席。必修ばかりやっていて実力が伸びなかった。	SA教員からの指導を行う。
学生E	公務員試験、保健師模試を優先的に取り組んでいたため、看護師模試の成績が伸びなかった。就職が決定後、看護師の勉強開始。	
学生F	学習に取り掛かるのが遅かった。	教員の研究室で勉強会を開き、学習を進めた。
学生G	定期試験の成績は良いが、模試の成績は伸び悩み、周囲の評価に不安があった学生。11月から学内模試を欠席するようになった。	学内模試は、点数は気にせず、必ず参加するように指導した。

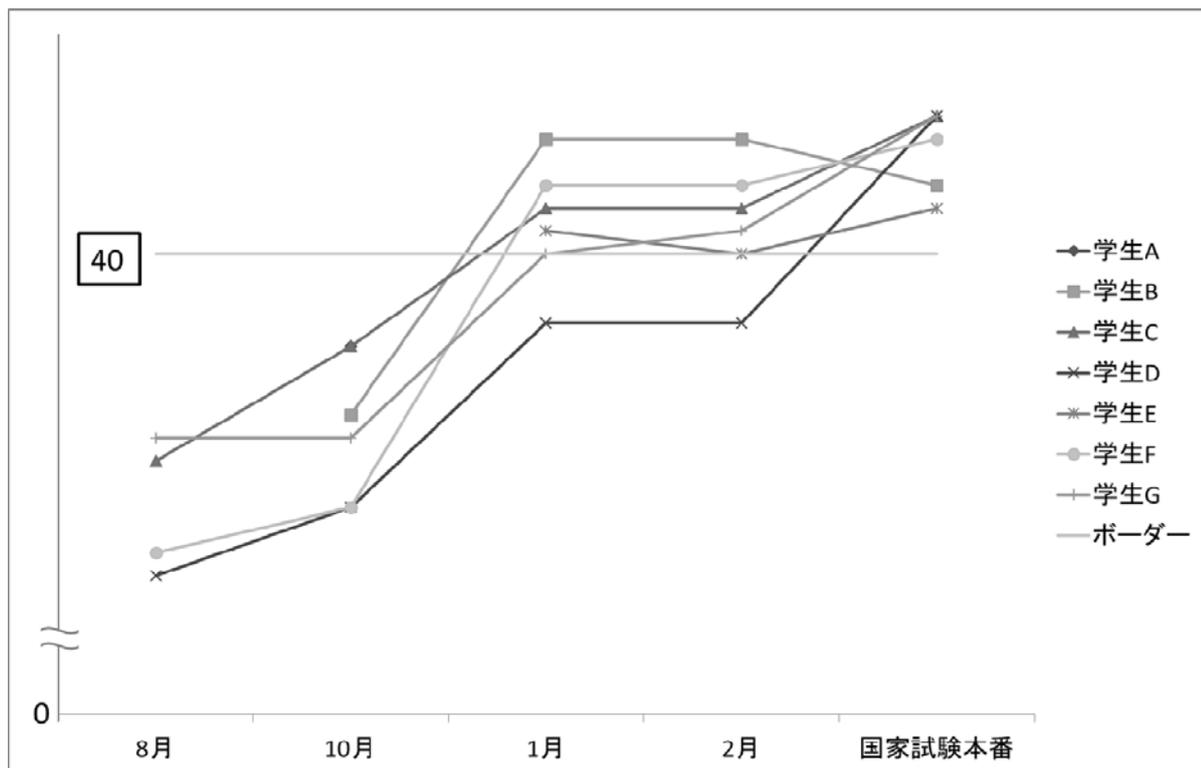


図3. 個別指導学生看護師模擬試験・看護師国家試験成績推移（必修問題）

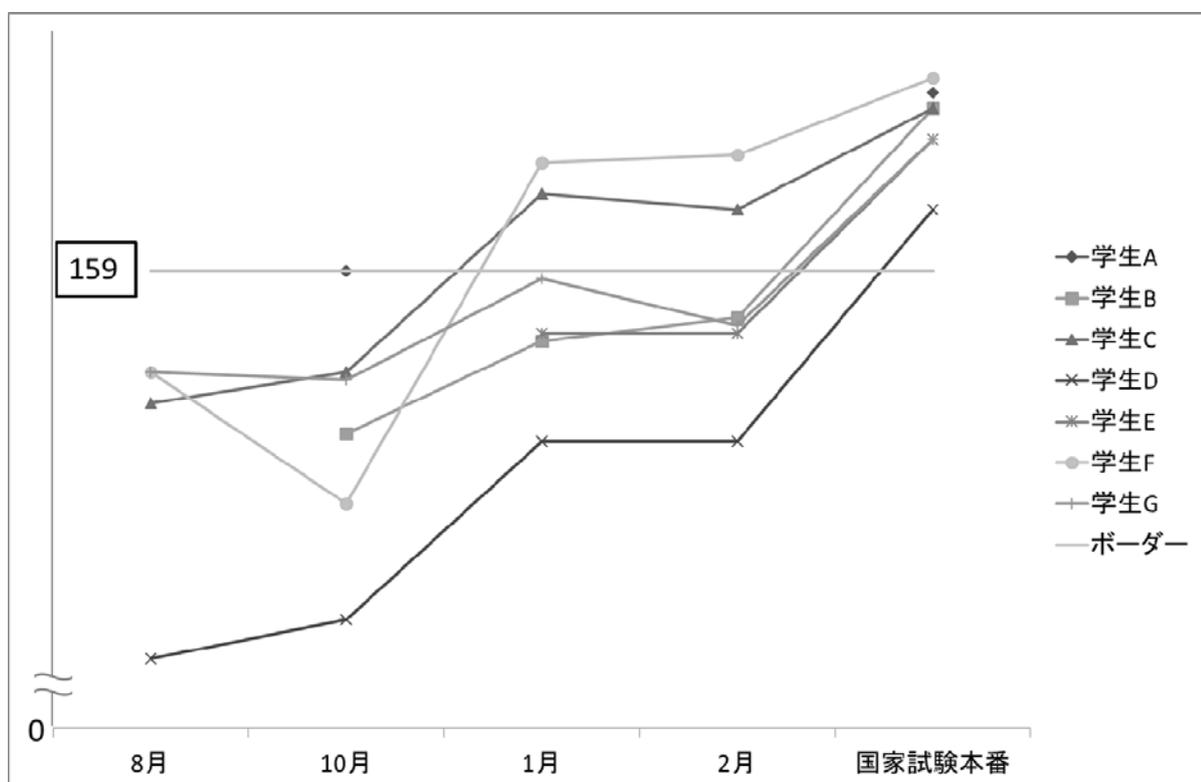


図4. 個別指導学生看護師模擬試験・看護師国家試験成績推移（一般問題・状況設定問題）

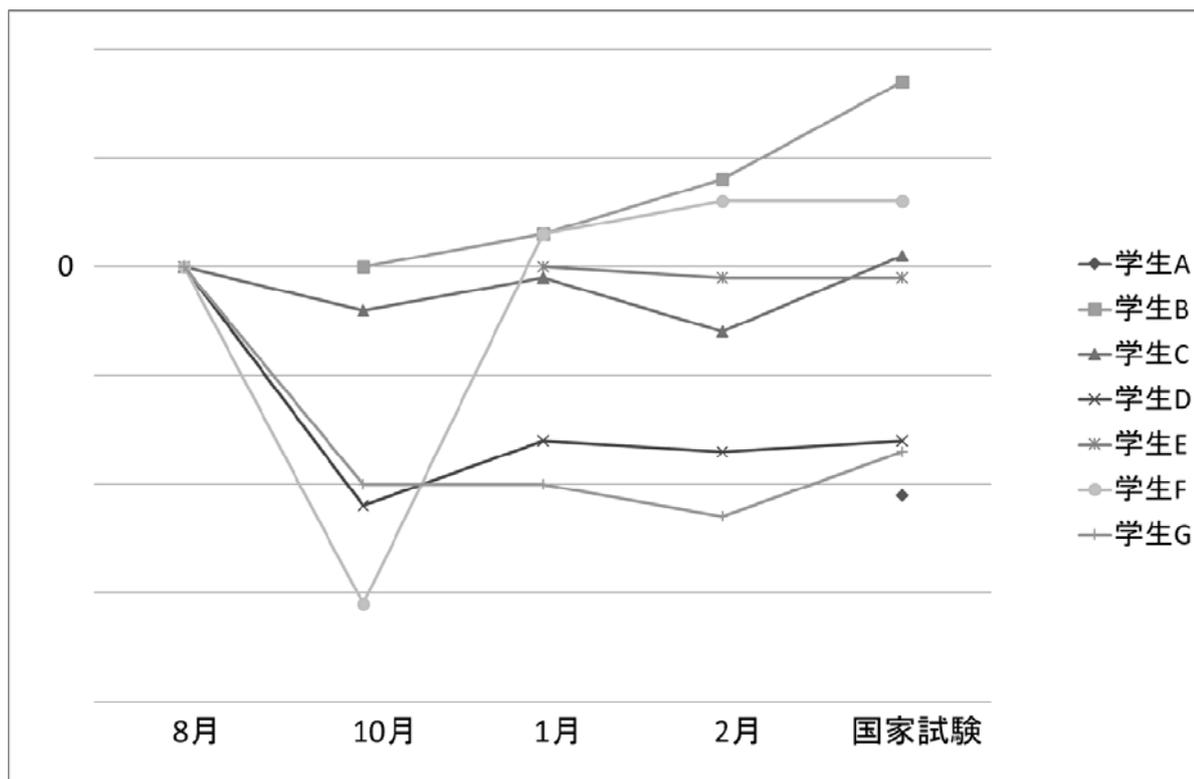


図5. 個別指導学生看護師模擬試験学内順位推移

学生それぞれの最初の学内順位を基準にし、順位の推移を図に示した。

2) 個別指導の効果

図3. および図4. を見ると、10月の外部模試から1月の外部模試にかけての得点の伸びが大きい傾向にある。一方、図5. を見ると、学生A・Eを除いて、10月の学内順位から順位を上げていることが分かる。また、学生A以外は順位に大きな変化は見られていない。このことから、他の学生と同様に10月から1月にかけて得点を伸ばしたということが考えられる(図2)。個別指導を実施することによって、他の学生と同様の得点の伸びを実現できたことは、個別指導の効果を示すものであると言える。

3) 個別指導の実際

各学生に行った個別指導の特徴を踏まえ、いくつかのケースに分類し具体例を交えて考察を加える。

(1) 体調不良学生への対応(学生A・B)

遠方からの通学や体調不良、疾患の治療が重なり、学内模試への出席ができず、学習に集中でき

る時間が非常に少なかった例。実質集中して学習できたのは国家試験の実施される月に入ってからとなった学生もいた(学生A)。

本人の努力と教員の励ましで体調不良下での学習を進めてきたことが、直前に集中して学習した期間に活きたと考えられる。

(2) 学習環境の提供(学生C・F)

理由は異なるが、両名とも本格的な国家試験の学習に取り掛かるのが遅かった学生。空いている研究室を利用し、集中して学習できる場所を提供したこと、両隣が教員の研究室であり、疑問があればいつでも相談できる状態であった。

学習環境が整えられ、短期間でも集中して実力をつけることができたケースと考えられる。

(3) 不安を持つ学生に対する対応(学生G)

定期試験ではトップクラスの成績を修めていたものの、模試の成績に不安があった学生。周囲の評価を気にしたためか、11月頃から学内模試を欠席し始めた。学生の不安に対し、適切な指導がな

されたことで、学内模試に出席することができ、実力をつけることができたと考えられる。

看護師国家試験は定期試験と違い、広範な範囲から問題が出題されるという特徴がある。ある程度の範囲内での出題には学生自身が対策をとって対応できたが、広範な範囲からの出題であるため、学生が学習を進めている範囲外からの出題もあったと思われ、そのため模試成績が伸び悩んだ可能性がある。

(4) 動機づけの強化 (学生 E)

就職先が決定し、目標が現実味を帯びてきたことで、学習への意欲が高められ、短期間に集中して学習を進められた。

学習への動機づけが結果に大きな影響を及ぼした好例と言える。

個別指導の対象となった学生の中には、(2) 学習環境の提供で述べたように学習に取り掛かるのが遅い学生もおり、そのような学生の動機づけが早期にでき、学習への意欲を高めることができれば、より確実に実力をつけることができる可能性がある。

4) 学習準備状態を把握する重要性

以上のことから、学生それぞれの状況に応じた指導が有効であると考えられる。また、個別指導においては必ずしも学習進度のみではなく、学習環境をはじめ、学習意欲、体調管理、生活習慣なども含めた学生を取り巻く状況の把握が重要である。それによって学生の学習準備状態に応じた指導を行うことが可能となる。一方で、個別指導の対象者、すなわち学習準備状態が十分でない学生をいかに早く見出すかが課題となる。

V. 課題と対策

前述の課題は、①速やかな個別指導対象学生の見極め、②個別指導が必要な学生の学習準備状態把握、③学習準備状態に合わせた適切な指導の3点に集約される。

1) 個別指導対象学生の見極め

いかに早く個別指導が必要な学生を見出すかと

いう課題に対しては、学内の国試対策（対策講義や模擬試験）の出席状況を一つの目安として個別指導の対象者を把握するよう努めた。これについては今後も継続する必要があると考える。

また、ほとんどの模試受験者が正答している問題を間違える学生は実践力・読解力が不足している可能性がある³⁾。個々の学生が高正答率の問題に対して正答できているかという点も、今後注意する必要があると考えられる。

2) 学習に影響を与える要因の検討

どのように学習準備状態をとらえ、適切な個別指導を行うべきか、A大学の学生の特徴を踏まえて検討する。看護師国家試験の学習に影響を与える要因として、以下の3つの観点から検討した。

(1) 学習習慣

学生が持っている学習習慣はそれぞれであり、自分で目標を設定し毎日学習する習慣がある学生もいれば、目標設定をできず漫然と時間を過ごす学生もいる。これらの学生の学習習慣を把握し、レベルに応じた指導を行うことが重要である。対策として、目標設定をできない学生には、教員から段階的に目標を提示し、学習に取り組む環境を整える必要がある。

(2) 成功体験

バンデュエラによれば、自己効力感を生み出す基礎となるのは、達成経験、代理経験、言語的説得、生理的説得によるとされており、なかでも最も自己効力感に影響を及ぼすのは、達成経験であると言われている¹⁰⁾。成功体験は達成経験として自己効力感に影響を及ぼす。そのため、成功体験の少ない学生は、自己効力感も低く学習に意欲を持ってない可能性がある。それによって学習への集中力が欠け、能率が上がらない学生も少なからず存在すると考えられる。対策として、このような学生には、学習し、問題を解き、正答へと至る成功体験を早期から積み重ねる必要があると考えられる。

(3) 教員との関係性

前述のような成功体験を得るためには、学生の

学習状況に合わせて個別指導を行うことが望ましい。その中で、指導を行う教員と学生との関係性も学習に影響を及ぼすと考えられる。学生が信頼を置く教員から称賛を得られることで、自己効力感が高まり、学習意欲へとつながる可能性が高くなる。

3) 学習内容と実生活のかい離（学生理解）

学生の学習行動を見ていると、以下のような2つの特徴的な傾向があることに気づく。

一つは、知識と実際が結びつかないことである。座学で学習することと、実際の生活とを別に捉えており、看護の知識が身の回りで起きていることとどう関係するか理解できない傾向が見られる。

もう一つは、教員の感覚ではあたりまえであることが、学生にとってはあたりまえではないことである。自分は毎日入浴をしているのに、臨地実習で受け持つ患者がそうではなくても違和感を覚えない学生もいることがこの傾向を示す例と言える。

このことから、教員側の価値観のみで判断し指導しても効果的な学習につながらない可能性があるため、対策として、学生がどのように考え行動をしているのかを、教員側も理解するために努力する必要があると考える。

4) 知識と実際を結び付けるための導き

想起型の問題では、プログラムに沿って繰り返し模擬試験を解くことで記憶しておくことができると考えられるが、解釈型、問題解釈型の問題は文章からその状況を具体的にイメージする必要がある。臨地実習で学生自身が経験した内容は、知識も定着しておりイメージしやすいため、設問をより正確に理解し、模擬試験でも正答を選ぶ傾向がある。しかし、設定された状況によっては原則通りの解答ではない場合や領域によっての特徴的な解答もあり、実習で経験していない内容に関する設問を苦手とする学生も多いと考えられる。

3) 学習内容と実生活のかい離で述べたような学生が解釈型、問題解釈型の問題を解いていくためには、対策として教員が設問の状況を説明・解説

し、状況を理解する手助けを要する可能性がある。このような指導を学生個々の理解度に合わせて何度か繰り返し、文章から状況を理解する素地を作ることも必要である。

5) 自己学習能力を高める関わりの必要性

これまで述べてきた中で個別指導が必要となる学習準備状態が十分でない学生は、自己学習能力が十分ではないと言える。学習に影響を与える要因として検討した内容は自己学習能力の育成に寄与することができるが、短期間でそれを獲得することは困難であると言わざるを得ない。

看護師国家試験対策を進めるほかに、早期から自己学習能力を育成する関わりが必要であると考えられる。

VI. 結論

以上のことから、学生それぞれの学習準備状態に応じた指導が有効であると言える。

課題として①いかに早く個別指導が必要な学生を見極めることができるか、②個別指導が必要な学生の学習準備状態を適切に把握できるか、③学習準備状態に合わせて適切な指導を行えるかの3点が明らかになった。それぞれの対策は以下のとおりである。

①学習準備状態が十分でない学生を早期に見出す
 学内の国試対策（対策講義や模擬試験）の出席状況を一つの目安として個別指導の対象者を把握するとともに、高正答率の問題に対して正答できていない学生に注意を払う。

②学生の学習準備状態を把握する

学習状況を把握するだけでなく、学習環境、心身の状態、生活習慣を含めた学習準備状態を把握する必要がある。そのために、学生と教員との関係性も重要となる。

③学習準備状態に合わせた適切な指導を行う

個々の学生に応じて、学習環境、心身、生活習慣を整えるための介入を行う。成功体験により自己効力感を高め、学習への動機づけを強めることが必要である。

Ⅶ. 参考文献

- 1) 厚生労働省ホームページ政府統計の総合窓口看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査平成 27 年度定員 2015 年度「定員、設置主体別、都道府県別（大学）」：
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001139988> (2015 年 10 月 28 日)
- 2) 新道由記子：今後の看護師国家試験に向けた本学国試・就職対策委員会の取り組み. 看護教育 2013;54:814-817
- 3) 前川玉緒：第 102 回看護師国家試験の東京アカデミーのデータ分析. 看護教育 2013; 54: 818-823
- 4) 安ヶ平伸枝, 菱沼典子ほか：基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫. 聖路加看護学会誌 2010; 14: 46-53
- 5) 池西静江：国家試験で問われる能力をどう育成するか. 看護教育 2014; 55: 472-483
- 6) 大日向輝美：誠実を胸に刻むこと, とともに未来を語ること. 看護教育 2014;55:484-492
- 7) 隆朋也, 豊島由樹子ほか：看護状況設定問題の自己学修を支援するデータベースの構築およびオンラインコンピュータプログラムの開発. 看護教育 2008;49:338-344
- 8) 看護師国家試験.com :
<http://www.nkokushi.com/goukakuritu.html> (2015 年 10 月 28 日)
- 9) 和田攻, 南裕子ほか：看護大事典第 2 版. 医学書院 2010
- 10) 野川道子：看護実践に活かす中範囲理論. メヂカルフレンド社 2010
- 11) 作山美智子：看護学科における国試対策の実践と課題. 東北文化学園大学医療福祉教育研究会 2013 年学術集会抄録集 2014